

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	和田 理寛
論文題目	モン民族宗派の解体と形成 —タイとビルマにおける国家僧伽の形成と少数民族—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的はタイとビルマ／ミャンマー (本論文は、主として「ミャンマー」へ改称する以前のビルマを対象とするため、以下「ビルマ」と記す) の二国における上座部仏教僧伽と民族の関係について、少数民族モンの事例から論じることである。具体的には、モンの「宗派」 (ニカーヤ) の変遷について、なかでも僧伽制度の転換期の経緯に注目しながら、その形成や解体の過程を解明する。主な問いは次の二点である。第一に、上座部仏教国タイとビルマにおいて僧伽制度の主軸である出家者の組織化と教学試験の変革は、両国それぞれのモン僧伽に対して、さらにはモン民族全体の在り方に対して、どのように影響を及ぼし、何をもたらしたのか。第二に、国家仏教の模範ともいえる聖典や戒律を重視する「厳格派」と、国民同化政策とは相容れない少数民族の「民族派」とが混合した「モン系タンマユット」という両義的で特殊な宗派が成立した経緯とその後の変遷を辿り、両国の僧伽制度や他のモン在来宗派との関係について、資料と聞き書きをもとに解明する。それにより、両国の僧伽制度を通じて少数民族政策を再考し、モンの現状や変遷を俯瞰し、これまでとは異なる視点からタンマユット派を含む両国の僧伽の歴史を捉え直す。</p> <p>序章 (第一章) では、まず、従来の民族論における範疇論への偏向を是正するために、本論文では民族の集団としての諸相に取り組むことを述べる。続いて、モンに関する先行研究に触れ、モン僧伽が文語の使用や教育に関わる重要な役割を担ってきたにもかかわらず、これまで研究対象としてあまり注目されてこなかったことを指摘する。そして、最後に本論文の背景となるモンの略史や人口分布といった基礎的な情報を概観する。</p> <p>第二章は、まず上座部仏教の「宗派」について、出家の系譜 (戒統) を重視し自らの厳しい実践を正しいとする「厳格派」と、俗語の違いに基づいた「在来派」 (民族派) の二つに分ける枠組みを提示する。続いて、タイ国の近代化政策の中で制定された僧伽統治法 (1902年) による中央集権的な僧伽統治制度導入がモン在来派に与えた影響を論じる。この制度転換以前は、「モン管区」の首長や管区次長は高い位階を与えられ、少数民族のなかでモン僧伽だけが個別の僧伽行政と教学試験を認められていたが、これは1912年には廃止され、モン式誦経は漸次的衰退を経て、現在、民族僧伽としての枠組みは曖昧となりつつある。</p> <p>第三章では、前章の制度転換期の前後において、モン僧伽がいかなる集団であったのかその実態を検証する。モン管区は全体として一枚岩ではなく管区内の要職者間には確執があった。さらにこの確執を逃れた第三の勢力がタンマユット派に参加し、「変更モン」と呼ばれた。変更モンは独自の具足戒式を伝える「宗派」として2002年まで存続した。こう</p>			

した展開を辿ることで、少数民族僧伽の動きを単純に国家との二項対立として捉えることはできないことを示す。

第四章はビルマのモン系タンマユット（マハーイェン派）について開祖の人物像を中心に、その成立の経緯を同時代資料から明らかにする。そして同派は組織的なタンマユット派布教の結果ではなく、開祖個人の個性を軸とした越境的活動によって生まれたことを示す。

第五章はビルマにおけるモン諸宗派の変遷を追う。ビルマの国家教学試験においては少数民族言語のなかで唯一モン語だけが使用を認められている。しかし1980年代、教学試験にビルマ語能力試験が追加されるとモン在来派のなかから反発が生じ、代わりに同派独自の試験が受験者を集めるようになった。この運動を通じてモン在来派は、結成が認められていない非公認宗派でありながら、多くの成員を定期的に結びつける汎民族的な結節点を形成することになった。また他のモン厳格派二派もこれに追随し、各派独自の教学試験を実施している。

第六章では、両国における世俗のモン語教育運動を比較する。まず、タイで民間の活動としてのモン語教育は成功していない状況を明らかにする。一方、ビルマについては、既存研究で注目されているモン語教育運動としての民族学校に対して、ここでは出家者主導によるモン語夏期講習に注目し、その制度的発展の経緯を追う。これらモン語教育運動は国の制度と競合的共存を目指す点で、ビルマのモン僧伽による各派教学試験の活動と共通点があることを指摘する。

第七章（結論）では、以上の論点をまとめる。

モン僧伽は国家の僧伽制度のなかで唯一特別な待遇を受けてきたために、制度の転換が少数民族にもたらす影響や反応について考察するうえで不可欠な事例である。モン在来派は、こうした制度転換を通して両国の間で対照的な過程を経てきた。タイでは公的な僧伽組織から排除されたが、反対にビルマでは自発的に汎民族的な制度作りを進めてきた。また、同化と抵抗をめぐる対照性の要因としては、公的な独自の僧伽組織の存在よりも、教学試験と民族言語の使用の重要性が明らかになった。

今一つ重要な論点として、両国それぞれ別の文脈のなかで形成されたモン系タンマユットの展開から、モン系宗派の両国における位置づけを導き出している。タイでは制度転換期におけるモン僧伽内部の分裂が契機となったのに対し、ビルマでは越境する開祖個人が両国の有力者から支援を得て教学活動などを展開したことが同宗派の端緒となった。ただし、出家の系譜を重視する立場は共通しており、結果として萌芽期のタンマユット派がモン僧伽に求めた戒統を逆輸入する形となった。そしてこの系譜の重視を軸に、タンマユット本流ともモン在来派とも異なる個別の「宗派」として、タイではタンマユット内部で半ば公認を受け、ビルマでは公認九派の一つとして認められてきた。